

## NICU に入院した子どもの母親をケアする 助産師の体験の本質を探究する過程

——研究者の内省を用いて——

木村 晶子\*

The research process clarifying the essence of the midwives' lived experience while caring for the mothers with infants admitted in the NICU: Using the researcher's reflection

\* Akiko Kimura

\* Doctoral Course, Graduate School, St. Luke's College of Nursing

**Abstract**: The purpose of this article is to describe the phenomenological research process that the researcher had become close to the essence of participants' lived experience. The research investigated the midwives' lived experience during caring for mothers whose infants admitted in the Neonatal Intensive Care Unit (NICU). The data were obtained from unstructured interviews for 10 midwives. The data were analyzed through the following 6 steps; to read the participants' narratives and to image the participants' experienced world, to reflect the researcher's past experience similar to the participants' experience, to deepen the researcher's reflection under the guidance from the supervisor, to identify each participant's tentative theme, to synthesis the theme that showed all participants' lived experience, and to clarify the essence of the midwives' lived experience during caring for the mothers with infants admitted in the NICU. This analyzing process was characterized by the researcher's reflection. The researcher was midwife and was able to reflect her past experience similar to the research participants. Using the reflective process, the researcher could understand the participants' experienced world and clarify the essence, the desire "I hope the mother will accept her baby", tacit dimension of the midwives' lived experience. The author concluded that the researcher's reflection is a useful tool for qualitative analysis to facilitate a deep understanding of the participants' lived experience.

---

\* 聖路加看護大学大学院博士後期課程

キーワード：

助産師	midwives
体験	lived experience
本質	essence
研究者の内省	researcher's reflection
NICU	NICU

## I はじめに

生まれてすぐに集中治療を必要とする子どもの母親は、不安や罪責感を感じ、喪失、恐れ、悲しみにうちめされる<sup>1)2)</sup>。このような母親とかかわる周産期のスタッフについて、橋本<sup>3)</sup>は「親が赤ちゃんをケアするためには、親自身がケアされていることが絶対に必要であるように、親子をケアしていくためには、スタッフ自身がケアされていることが大切である」と述べている。困難な状況にある母親に十分なケアをするためには、スタッフ自身のメンタルヘルスも重要である。

子どもが入院する新生児集中治療室（Neonatal Intensive Care Unit：以下NICUと略す）の看護師は、両親たちの恐れや自責感などの反応を受け止めると同時に、無力感や挫折を感じるといわれている<sup>4)5)</sup>。一方、出産後の母親のケアを担当する産科病棟の助産師はどのような体験をしているのだろうか。この疑問は、研究者自身も助産師としてNICUに子どもが入院した母親を看護する中で持ち続けたものであり、その中で母子同室をしている母親とかかわる時とは異なる難しさを感じたことが本研究の動機となった。

研究者自身の経験と類似した研究対象者の体験を研究するにあたり、研究者は自身の過去の臨床経験について内省を行なった。一般的に質的研究においてバイアスを客観視するために内省するが、本研究では内省を、研究対象者の体験世界に接近するための方法として用いた。この方法を用いることにより、NICUに入院した子どもの母親とかかわる助産師の体験として固有の思いや感情のみならず、体験の根底に何があるのか、その本質に迫ることができたと考える。

NICU に入院した子どもの母親をケアする助産師の体験の本質を探究する過程

本稿の目的は、出生直後に NICU に入院した子どもの母親にかかわる産科病棟の助産師の体験について、その本質を探究する過程を中心に記述することである。これまでわが国においてほとんど用いられていない、研究者の主観を直視するタイプの現象学的アプローチによる分析過程を提示することは、保健医療分野における質的研究の発展に寄与するものと考えられる。特に看護学においては、現象学の活用に混乱がみられていることから<sup>6)</sup>、研究の過程を提示することは今後同様の研究を行う上での重要な基礎資料となる。この分析から得られた知見、すなわち NICU に入院した子どもの母親と産科病棟でかかわる助産師の体験の全体像は、木村<sup>7)</sup> に詳しい。

## II 研究方法

### 1. 研究デザイン

本研究は、現象学的アプローチによる質的研究である。現象学的アプローチは、日常生活における体験の本質や意味を理解することを目的とし<sup>8)</sup>、助産師の体験を研究するのに適している。また、本研究で用いた方法は、現象学的アプローチの中でも heuristic research に類似している。この方法は、研究者が自分と対話することを重視し、言葉に表わされない自身の内面に気づくことにより他者の類似した反応を知ることができると強調している<sup>9)</sup>。

### 2. 研究対象者

NICU のある病院の産科病棟で、子どもが NICU に入院した母親を看護した経験のある助産師を選定基準とした。NICU と産科を標榜する 3 施設に研究協力を依頼し、産科病棟の責任者に紹介を受け、研究協力の同意を得た助産師10名を対象者とした。

### 3. データ収集方法

非構成的インタビューにより、データを収集した。最初に、「出生直後から NICU に収容された赤ちゃんのお母様とかかわっている時のあなたのお気持ち

や考え、行動について思い出せることを、できるだけ詳しくお話しください」という質問を行なった。インタビューの場所は、研究対象者の利便性や意向にあわせて、対象者が所属する施設内か研究者の所属していた大学内で行なった。また、了解を受けた後、インタビュー内容を録音し、これを逐語録としたものをデータとした。データ収集期間は、2007年4月3日から6月21日だった。

#### 4. 分析方法

データ分析は、次の6つの手順で行なった。

ステップ 1. インタビュー時の研究者と研究対象者との対話の逐語録をデータとし、次にデータとの対話により、語られた世界をイメージする。

ステップ 2. 研究者は、自身の過去の臨床経験を可能な限り詳細に思い起こした「内省日記」を用いて内省する。

ステップ 3. ステップ 2 の内省日記を用いて研究者と研究指導者との対話をし、内省したことを深める。

ステップ 4. データから対象者ごとの体験に、ハイリスク児の母親とかかわる助産師の体験として特有と考えられる部分に「仮テーマ」をつける。

ステップ 5. 仮テーマを他の対象者のデータも用いて解釈し、対象者全体の体験を表すテーマとして統合する。

ステップ 6. ステップ 4, 5 を通して明らかになったテーマの根底に何があるのか、ステップ 2 と 3 で行なった内省を手がかりにしながら、助産師の体験の本質を明らかにする。

ステップのつながりは、ステップ 1 で研究対象者に語られた世界を分析するために、ステップ 2, 3 の内省を行なった。ステップ 4, 5 では、データに浸るかのように、ステップ 1 で得たデータに特有の仮テーマ、テーマを特定した。ステップ 2, 3 で内省を行なっている作用で、ステップ 4, 5 では、データの中でも特に助産師の気持ち、母親の気持ちを表わす言葉への感受性が高まる。ステップ 6 では、ステップ 1 の語りから明らかになったステップ 4, 5 の仮テーマ、テーマの根底にある本質を探るために、ステップ 2, 3 で行なった内省を用いて対象者の語る世界へ接近した。

## 5. 倫理的配慮

研究対象者に対し、研究への協力は自由意思であること、秘密を厳守すること、データを厳重に管理すること、データは個人が特定できないようにすることを説明し、これらを遵守した。

研究者が内省したことを研究指導者へ提出する際には、研究者が過去に出会った人々について個人が特定できないよう配慮した。

## Ⅲ 結 果

本研究は、助産師の体験の本質を探究するまでの過程を示すことを目的としているため、分析方法の6つのステップ毎に得られた結果を述べる。

### ステップ 1. 研究者と研究対象者との対話

まず、インタビュー中の対象者との対話により、次の語りを得た。研究対象者の一人である助産師佐藤さん（仮名）の語りを示す。

「その方も結構長く切迫早産で入院されていた方だったんですけど、赤ちゃんが早産で生まれただけじゃなくてちょっと何か、他に合併症があったり……心臓のほうで。で、その人は、すごい『大丈夫です』って言いながら、後ろになんかこう……結構、頑張ったのに合併症があったみたいなショックとかがたぶんあったと思うんですけど、表情も固くって、でも何か聴くと『大丈夫』みたいな感じでわりと気丈にふるまってるけど、なんかちょっと心配だってお母さんがいましたけど。そのときは、NICU に面会に行くときに一緒についていくように、赤ちゃんとか触れてるときどういう表情なのかとか、どういう気持ちなのかなっていうふうに思ったんですけど」。

この語りから研究者はインタビュー中に、「佐藤さんは母親がショックな気持ちを表出できないことを心配しており、また児に対する母親の思いが気になっている」ことを感じた。そして研究者自身が過去に臨床で NICU 収容児の母親とかかわっていたときの感覚を用いて、佐藤さんの語る世界に次のように近づいた。

研究者は佐藤さんがかかわった母親に対して、「ショックがありそうで、表情が固くて、気持ちの表出ができないのは、まだ出産して間もないのだろうか」、  
「児と触れているときの表情や気持ちについての情報がまだそんなになかったということか」と思い、この母親が「産後何日目くらいだったか覚えていますか」という質問をし、産後3日目くらいであったことを確認した。

次に研究者は、インタビュー中に得たデータとの対話により、「産後3日目くらいで出産後の日が浅いうちには、母親も児に数回しか会っていないだろうし、別のスタッフも毎回 NICU への面会に付き添えていないため、母親が児と会っているときの表情や気持ちに関する情報が不足している」ことを想像した。そして、佐藤さんがこの母親を受け持ったときに、母親の児に対する気持ちが知りたいと思ひ、NICU へ付き添ったと理解した。

## ステップ 2. 研究者の内省

研究者が内省したことをそのまま次に記す。

「石川さん (仮名)。早産で帝王切開術後1日目に受け持つ。児に緊急で腸の手術を行わなければならない、石川さんは児の手術の説明を受けるため、車椅子で NICU へ行くのに付き添った。石川さんはとくに質問もなく、手術の説明後に児と面会する。児を撫でていて、言葉はなかった。部屋に戻り、『急なことでびっくりされましたよね』と声をかけ、頷いていた。ここではじめて石川さんの目から涙が流れた。私は、『私もびっくりだし、(児が) どうなるんだろう』と一緒に心配していた。言葉がないってこういうことだと思った。早く治ってほしいけど、手術がかわいそうな感じがすると、手術までの時間をもどかしい。できることがあるなら何でもするからって思っても何もできない無力感があった。」

この場面は、帝王切開術後1日目で、鎮痛剤を使用しながらベッドの上で少しずつ横向きになり、ベッドごと体をおこしてようやく座ることができるようになった石川さんが、車椅子に乗るとのことだけでも他の術後の患者よりも無理をしている状況である。身体面でも無理をしている上に、想像もしていなかった

NICU に入院した子どもの母親をケアする助産師の体験の本質を探究する過程  
児の手術となり、急な話で家族にもまだ連絡しておらず石川さんの負担が大きすぎると心配したことを思い出した。そして過去の研究者が感じた、「そばにいて、できることなら何でもしたいのに、何もできないもどかしさ、無力感」を思い起こした。

### ステップ 3. 内省を深めるための研究者と研究指導者との対話

ステップ2で研究者が自分の過去を内省したことを E-mail を用いて研究指導者とやりとりをした実例を示す。ステップ2と同じ場面である。

内省の場面：石川さんは児を撫でていて、言葉はありませんでした。

研究指導者：このとき、石川さんに対してはどう思いましたか。

研究者：石川さんに対しては、「赤ちゃんに（心の中で）何て話しかけているのかな」と思いました。

内省の場面：お部屋に帰ってきて、「急なことでびっくりしましたね」と私が声をかけると、ここではじめて石川さんの目からぼろぼろと涙がこぼれてきました。それまで穏やかにしていた石川さんが、「頑張りすぎている」ように私には思えていて、「涙がだせてよかった」と思いました。よかったのだけれど、だからといって私が何かできるわけではないので、その沈黙の間は長く感じられました。

研究指導者：どうして頑張りすぎているように思っていたのでしょうか。

研究者：スタッフの私でも急な展開に驚いて、児が心配になっているので、母親である石川さんの心配は大きいだろうな、心の中は穏やかでないはずと考えられるにもかかわらず、石川さんは取り乱すこともなく、表面上穏やかにみえたので、無理をしていると感じました。

### ステップ 4. 対象者ごとの仮テーマ

仮テーマとは、いずれテーマとなる可能性のあるものである。本研究におけるテーマとは、ハイリスク児の母親とかかわる助産師の体験として固有の特質・特性をあらわすものである。仮テーマは、ひとりの対象者からのデータに3つから7つ導き出された。ここでは、助産師佐藤さんのデータから仮テーマを導くまで

の例を示す。

仮テーマを導くために、佐藤さんの語りの文脈ごとの意味を考えた。ステップ1で示した文脈は、「児と一緒にのときの母親の気持ちを知りたい」という佐藤さんの思いを表すと考えた。次に、類似した思い、関連がある思いを表す文脈を同じ佐藤さんの語りから抽出した。その結果、「児と一緒にのときの母親の気持ちを知りたい」という思いに類似、あるいは関連のある助産師佐藤さんの思いには、1) マイナスに受けとめないでほしい、2) 児への声かけから、愛着を感じる、3) ほんとうの気持ちを引き出したいという3つがあった。それぞれの佐藤さんの語りと研究者の解釈を次に示す。

#### 1) マイナスに受けとめないで欲しい

佐藤さんの語り：「自分が早く産んでしまって申し訳ない」とか、「自分がもうちょっと頑張ったら」とか、「自分のせいで」とか、そういうふうには早産の人って思うと、育児に繋がっていくとつまづきやすいと思うんで、そのお産をどう思ってるのかなとか、きいたほうがいいのかと思ってるんですよね。

研究者の解釈：佐藤さんは、ケアをするために母親の気持ちを引き出したいと思っていた。早産の母親は自責の念を抱くと育児につまづきやすいという知識から、母親が「自分のせいで」などと思っていないかをまず確認し、もしもマイナスに受け止めていたら、「そうじゃない」と伝えるケアに繋げるために、母親の気持ちを引き出したいと思っている。その背景には、「マイナスに受け止めないで欲しい」という思いがある。

#### 2) 児への声かけから、愛着を感じる

佐藤さんの語り：触って、赤ちゃんに対して「頑張ってるね」みたいな声かけをしたりとかされてて、そんなにすごい固い表情で「赤ちゃんに触るのも緊張して」って感じではないなってふうにして。私にそのとき心開いてたのかどうかもわからないんですけど。一緒に（NICUに）行って、「大丈夫？」みたいなこと言ったら、「うん」みたいな感じで。心配な表情とかではなくって、「赤ちゃん頑張ってるね」みたいな落ち着いてきている感じ



NICU に入院した子どもの母親をケアする助産師の体験の本質を探究する過程  
ですかね。

研究者の解釈：助産師佐藤さんに心を開いているのかわからなくても、母親の「赤ちゃん頑張ってるね」という言葉から、愛着が育まれていると感じた。

### 3) ほんとうの気持ちを引き出したい

佐藤さんの語り：お母さんの思いがあるので、無理に（母乳を）搾ろうねって言ったりとかはしないで、お母さんがどういう気持ちなのかを引き出せるようにかかわれたらいいのかなって思って。さりげなくこう、「（母乳を）搾りますか？」って聞いたりとかしてたんですけど、「搾りません」みたいな感じだったんですよ。だから、ほんとの気持ちが引き出せてないなって気持ちでかかわってたんですけど。

研究者の解釈：佐藤さんは、搾乳に積極的ではない母親にかかわるときに、搾乳に積極的になれない母親の気持ちがあるはずと思い、母親がどのような気持ちなのかを引き出したいと思った。母親の言葉が「搾りません」というだけで、なぜ搾らないのか表出されないときに「ほんとの気持ちが引き出せてない」と感じた。

以上のように、佐藤さんが語ったデータのうち類似する文脈とその意味を抽出した。その後、これら全体を表すものを「マイナスに思う人が多いので、まず母親の気持ちを引き出したい」という仮テーマとして表現した。

## ステップ 5. 対象者全体の体験を表すテーマ

ステップ4で表現した仮テーマに類似する、他の助産師の仮テーマを抽出した。「マイナスに思う人が多いので、まず母親の気持ちを引き出したい」という仮テーマに類似する、他の助産師の仮テーマには、「児の話をどこまでしてよいかかわからない」、「かわいいかわいい新生児期の話ができる場をつくりたい」があった。ここでは、他の対象者の仮テーマの一例として、「児の話をどこまでしてよいかかわからない」について述べる。

助産師田中さん（仮名）の語り：私が受け持ったときはまだ、夜とかが多かったんで、（NICU への）面会の話とかはなかなか出ずって感じで、日

中に、「面会に行きたくない」っていうふうに言ってみたいんですけど。私的には、すごいお母さんの気持ちもわからなくはないし。その子をどう受け入れていくんだろうっていうのは、なんか、すごい辛いだろうなあっていうのは感じていました。「このお母さんはどういうふう考えてるのかなあ」って思いながら、お母さんのところに行って、「赤ちゃんの話もどの程度していいんだろう」っていうのは自分の中で、「どこまで踏み込んで、赤ちゃんの話ってしていったらいいのか」っていうのは、「どうしたらいいのかなあ」ってうやむやなままでいて、あんまりそういうことには触れていない自分がいたのかなあって思いますね。

**研究者の解釈：**田中さんは母親の辛さを感じ、児の面会にも辛くて行きたくない母親の気持ちをわかっていた。母親は児を受け入れられず、自分から面会や児について話さず、それらを聴くには田中さんのほうから話を切り出さなければならない。話を切り出したところで、「赤ちゃんには会いたくない」という否定的な答えがでたとき、それが何故なのか追求することは、母親を責めることになりかねない。そのため、児のことをまだ受け入れられないと感ずる母親に、児の話をどこまでしてよいか田中さんにはわからなかった。

このような対象者ごとの仮テーマを類似するもの同士で集め、集めた仮テーマとその背景となるデータ、解釈を何度も読み、対象者全体の体験の特質を示すテーマは何かを検討した。「マイナスに思う人が多いので、まず母親の気持ちを引き出したい」、「児の話をどこまでしてよいかわからない」、「かわいいかわいい新生児期の話ができる場をつくりたい」という仮テーマから導いたテーマは、「思いを聴くことの難しさ」である。テーマは、助産師が母親とかかわっている、まさにその時に思っていることを表わそうとした。したがって、「思いを聴く」だけでなく、「思いを聴こうとしても、それは助産師にとって難しい」と表現した。

## ステップ 6. 本質の探究

本質とは、ハイリスク児の母親とかかわる助産師の体験の根底にあり、体験たらしめているものである。ステップ5で特定したテーマは、もともと助産師の内面にある何に支えられているのか探究した。本質を特定するには、ステップ2, 3で行なった研究者自身の過去の臨床経験に関する内省を用いた。表面には現れない、「何故、助産師はハイリスク児の母親とかかわるときに思いを聴くことの難しさを感じているのだろうか」「そこに助産師の何があるのだろうか」という問いの答えは、研究者の経験を内省することにより引き出された。以下に、本質を導く過程を示す。

ステップ2, 3で研究者は、ぽろぽろと涙をこぼす石川さんに、それまで穏やかにしていたのが「頑張りすぎている」と思えたので、「涙がだせてよかった」と思ったことを振り返った。そして研究指導者から「どうして頑張りすぎているように思えていたのか」と問われ、心の中は穏やかではないはずの石川さんが無理をしていたと感じたことを振り返った。ここで、なぜ無理をするといけないかと考えた。母親が無理に感情を抑えると、本当の気持ちが抑圧され、その状態では他者（児）に目が向かなくなる。児に目を向けるためには、母親にショックや心配のありのままの気持ちを出してほしいと助産師は思っているのである。したがって助産師は「気丈にふるまう母親」を心配すると同時に、「母親の児に対する思いを知りたい」という気持ちをもっていた。

次に、助産師が全神経を集中させ、緊張感を持ちながら母親の児に対する思いを知ろうとしているときに何が起きているのか。ステップ2, 3で内省した石川さんとのかわりか、研究者は「石川さんは児に触れることができるだろうか」と固唾を飲んでいてを思い出した。もし児に触れることができなければ、児を受け入れることに時間がかかる可能性が高いことを意識していたことに気づいた。石川さんが児に触れることができ、児を受け入れることにおいて、一歩進んだというイメージである。ステップ1に戻ると助産師佐藤さんは、ショックがありそうな母親がNICUに面会に行くときについていき、児に対する思いを知ろうとしていた。それは、母親のショックな気持ちが児への関心に影響し、児の受け入れに時間がかかることを懸念していると考えた。このことから、助産師は

母親に対して、「ショックな気持ちを表出し、児に目を向け、児を受け入れてほしい」と考えていると捉えた。

ここで、ステップ4の2)より、助産師佐藤さんは母親が児へかけている言葉から愛着を判断していることを確認した。また、ステップ5で特定したテーマ「思いを聴くことの難しさ」につき、助産師が児を受け入れられない母親に、児の話をもどこまでしてよいのかわからなかったのは何故か検討した。その結果、「児を受け入れられない母親に児のことを切り出すと、ますます受け入れが困難になるのではないかという懸念から、難しさを感じている」と考えた。そして助産師が、母親が児を受け入れるのが困難になることを懸念する背景に、「児を受け入れて欲しいという助産師の願い」があるのではないかと考えた。

次に、ステップ1で得た、全ての対象者のデータを読み返した。

「産んだ実感とか、やっぱりその子を受け入れるっていう面でのケアは、やっぱり NICU にいる赤ちゃんを産んだお母さんの場合は必要なかなって思うんですけど」という語りがあった。この語りは、NICU 収容児の母親とかかわる産科病棟の助産師の体験の本質が「児を受け入れてほしいという願い」である根拠の1つとなった。

## IV 考 察

### 1. 「願い」という助産師の体験の本質について

本研究より、NICU に入院した子どもの母親とかかわる産科病棟の助産師の体験の本質は、「母親には児を受け入れて欲しい」という願いであることがわかった。木下<sup>10)</sup> のレビューによると、ハイリスク児出生による両親の心理過程は初期にはショックを受け、さまざまな感情を持ち動揺し、時間の経過とともに徐々に子どもに対する肯定的感情を持つ。反応の強さや持続時間は明らかになっていないが、母親が出産後産科病棟に入院する7~10日前後という短期間に、児を受け入れられることは困難であると考えられる。つまり、産科病棟の助産師は「母親には児を受け入れて欲しい」という願いがかなうときまでかかわることがほとんどない。このことは助産師にとって、母親とのかかわり方が良かったのか、児

NICU に入院した子どもの母親をケアする助産師の体験の本質を探究する過程を受け入れる方向にプラスになったのかを、産科病棟入院中に確認できないことを意味する。

分析過程ステップ5で示した例のように、児との面会をしない母親へ「どこまで踏み込んで赤ちゃんの話ってしたらいいのか」と悩む助産師も、児の話により、母親が児を受け入れる方向に向かうのかどうか確信がもてずに難しさを感じていた。そして助産師は、ショックを受けている母親に、「赤ちゃんの話をしたいたのかどうか」を確認できる状況にない。同時に、このような状況の母親に、子どもの話をするのがどのような影響を与えるのか確信できず、助産師が感じる難しさは解決できないままになっていた。

この難しさを解決するには、助産師がかかわった母親が児を受け入れられたのかを知ることが必要と考える。産科病棟の助産師は、産後の限られた期間しか母親とかかわれないため、「母親に児を受け入れて欲しい」という願いがかなう時を知る機会が乏しい。今後、母親の退院後も NICU を訪れた時や、母親の産後検診を行なう外来などで継続的に助産師が関わることができると、母親の子どもに対する思いを確認できる機会が得られる。

橋本<sup>11)</sup>は、NICU のスタッフに関して、「達成感と喜びは、バーンアウトの予防薬」であると述べている。同様に、産科病棟の助産師も、児を受け入れた母親にかかわる機会を持つことで、喜びや達成感を感じ、仕事の満足感が得られると考える。

## 2. 研究者の内省を用いた分析方法の意義

本研究は、研究者の内省が研究対象者の経験の本質に接近する一つの方法であることを示した。例えば、「何故子どもが NICU に収容された母親が気丈に振舞うと心配するのか」と自身に問うことにより、助産師は母親が心配や不安の感情を表出できないと児に関心が向かない可能性を心配することに気づいた。それは、研究者が NICU に入院した子どもの母親をケアした時、その根底に「児を受け入れて欲しい」という願いがあったことに気づかされたからである。そしてここには分析過程ステップ3の作用がある。もし分析過程ステップ2のみの研究者自身だけでの内省であれば、「何故石川さんが頑張りすぎているように思えたのか」

と問うことができなかった。この問いにより、分析過程ステップ6の本質の探究で、「何故母親が頑張りすぎているといけないのか」「何故、母親が無理をすといけないのか」と振り返ることができた。その結果、「母親がづらい感情を抑えていると、本当の気持ちが抑圧され、わが子に関心が向けられない」ことに気づき、助産師の感情の奥にある、「母親には児を受け入れて欲しい」という願いにたどりついた。

本質として「願い」がありそうだと確認した後、全ての対象者のデータを読み返した。それは、研究結果が単に研究者の内省のみによるものではなく、確かに研究対象者が語っているという証拠を示すためでもある。その上で内省日記を読み返し、研究者自身も過去には意識していなかった「願い」に気づき、研究対象者の体験に接近できた。

全対象者のデータを読み返すことにより、仮テーマやテーマになかった、「産んだ実感とか、やっぱりその子を受け入れるっていう面でのケアは、NICUにいる赤ちゃんを産んだお母さんの場合は必要なのかなって思うんですけど」という語りが目にとまった。この語りは、助産師の体験の本質が「児を受け入れてほしいという願い」であると確信させた。そして、仮テーマやテーマを特定したときのデータを読み返し、確かに本質が願いであることを確認した。例えば、仮テーマ「ほんとうの気持ちを引き出したい」を導いた佐藤さんの語りから、「搾乳に積極的になれない母親に対し、無理に搾ろうと言わないのは何故か」と考える。無理に搾乳を促すことは、気持ちが児に向かない母親を責めることになりかねない。母親の自責感を助長し、かえって児に目が向かなくなるだろう。児を受け入れてほしいと願う助産師なら、児に目が向かない母親の気持ちをそのまま表出できることを重視するはずである。このような方法は、研究結果の妥当性を高めるものとなる。Heuristic research においても研究の妥当性を確保する方略に、何度もデータに戻ることがある<sup>10)</sup>。

## V 結 論

本研究は、NICU に入院した子どもの母親とかかわる産科病棟の助産師の体

NICU に入院した子どもの母親をケアする助産師の体験の本質を探究する過程  
験の本質について探究し、その結果、助産師の「母親には児を受け入れて欲しい」という「願い」を明らかにした。今後、助産師は、この願いがかなうところまで母親と継続的にかかわることにより、喜びや満足感を得ていくものとする。このような体験の本質を探究するには、研究者自身の内省と何度もデータに戻る  
ことが有用である。

## VI 研究の限界と課題

本研究では、研究者の内省を基に対象者の体験の本質に接近する方法を試み、その意義を確認した。しかしながら、研究者の内省を用いることが他の質的分析においても適用できるかにつき、今の段階で結論付けることには限界がある。今後は、研究者の内省を用いた質的分析方法を他の研究にも応用し、その有用性について検討する必要がある。

本稿は、平成19年度札幌医科大学大学院保健医療学研究科へ提出した修士論文の一部を大幅に加筆修正したものである。本稿の一部は、第23回日本保健医療行動科学会学術大会において口頭発表した。

### 謝辞

本研究にご協力くださいました助産師の皆様、当該施設で調査窓口となって頂いた皆様に感謝します。今回の方法論を導き、内省を深めるためにご指導くださいました札幌医科大学医療人育成センター教養教育部門の道信良子准教授に深謝します。また、研究の全過程に渡りご指導賜りました天使大学看護栄養学部看護学科の丸山知子教授にお礼申し上げます。

### 文 献

- 1) Klaus MH, Kennel JH 著, 竹内 徹, 柏木哲夫, 横尾京子訳: 親と子のきずな, 229-239, 医学書院, 東京, 1985
- 2) Sammons WAH, Lewis JM 著, 小林 登, 竹内 徹監訳: 未熟児その異なった出生, 78, 医学書院, 東京, 1990
- 3) 橋本洋子: NICU とこころのケア, 85, メディカ出版, 東京, 2000
- 4) Rubarth LB: The lived experience of nurse caring for newborns with sepsis, Jour-

- nal of Obstetric, Gynecologic & Neonatal Nursing, 32 (3) : 346-356, 2003
- 5) 安藤晴美, 岡部恵子: 親子関係形成に向けての面会に関する NICU 看護師の思い, 山梨大学看護学会誌, 4 (2) : 47-57, 2006
  - 6) 渡邊美千代, 渡邊智子, 高橋照子: 看護における現象学の活用とその動向, 看護研究, 37 (5) : 431-441, 2004
  - 7) 木村晶子: ハイリスク児の母親とかかわる助産師の体験, 日本助産学会誌, 23 (1), 72-82, 2009
  - 8) Patton MQ: Qualitative research and evaluation methods 3rd ed, 104, Sage, California, 2002
  - 9) Moustakas C: Heuristic research, 16-20, Sage, California, 1990
  - 10) 木下千鶴: NICU におけるファミリーケアに関する研究の動向, 日本新生児看護学会誌, 5 (1), 2-12, 1998
  - 11) 前掲書3), p. 84
  - 12) 前掲書9), p. 33